The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ICT環境におけるベトナム語の学習 ： 自律学習の可能性
Author(s)	清水, 政明
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2014, 15, p. 31-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70370
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ICT 環境におけるベトナム語の学習
自律学習の可能性—

清水　政明（言語文化研究科　言語社会専攻）

１．ICT 環境における学習コンテンツの革新

日本におけるベトナム語教育の歴史を振り返ると、昨今の ICT 環境の発展とその語学教育への応用をそこに位置づけることは大切なことである。CALL システムや AV 機器等の技術的な進歩に加え、ネットワーク環境の発展による各種情報へのアクセシビリティーが学習コンテンツを格段に豊富にした。今やウェブ上には非合法的なものも含めると膨大な量のマルチメディアコンテンツが参照可能であり、中には極めて歴史的価値の高いコンテンツもある。そこで学習者に求められるのは、自分にとって有用なコンテンツを見極める選球眼であることは言うまでもないが、それが身についた頃にはもうすぐ卒業というのが実情であろう。そこで、大阪大学の ICT 環境を十二分に利用しつつ自律的にベトナム語を学習するための一つの方法をここに提案したい。初級学習を終えた中級以上の学習者のための方法であり、授業中にいつも口酸っぱく言う内容であるが、改めてここにまとめておきたいと思う。ただあくまで一つの提案であることを断っておく。

２．ウェブ上のツール・コンテンツ

まず語学に欠かすことのできない辞書であるが、ベトナム社会科学院言語学院と在ハノイ辞書学センターにより開発された最も規範的な『ベトナム語辞書』の内容がそのまま http://tratu.soha.vn/で検索可能である。また、日本人学習者にとって有用な漢字語及び漢字音を検索できる、Thiều Chửu『漢越字典』の内容に基づいて開発されたウェブ版『漢越辭典摘引』（http://www.hanviet.org/）は便利である。

2 年生向けリスニングの授業で長年活用させて頂いている NHK World のコンテンツ（http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/vietnamese/top/）は、ここ数年音声ファイルと同時に文字データも公開されており、自習がよりやりやすくなった。しばしば発音の習得が難しい言語として取り上げられるベトナム語だが、その修得には 4 技能の中でもリスニングの学習が要と考えている。優れた ICT 環境の中で優れた教材に囲まれていても、やはり語学に王道はなく、ひたすら《聞く→辞書を引く→書き取る→文字データでチェック→発音してみる→モデルを聞きながらそのスピードに近づける→改めて聞く》という地道な練習のサイクルを積み重ねることにより、知らず知らずのうちに相当速いスピードのニュースの概略が聞き取れるようになってゆくものである。

３．独自に開発したコンテンツ

次いで、日本人にとって比較的容易といわれるリーディングであるが、実はそれが容易なのは漢語を多用し文の構造が極めて単純で論理的な論説調の文章（上述のニュース等）に限られる。例えば子供向け昔話等では漢語の使用率が格段に下がり、複数の動詞句が止め処なく繋がっていたり、一体どの人物を指しているのかわからない複雑な呼称法等、学習者の度肝を抜く文法事項のオンパレードである。しかし、やはりそれが本来のベトナム語の姿なのであり、それをわかりやすく説明すること自体至難の業である。それを承知の上で敢えて昔話を取り上げた教材が「高度外国語教育全国配信システムプロジェクト」の一環として開発した「ベトナム語独習コンテンツ」である（http://cl.minoh.osaka-u.ac.jp/flc/vie/index.html）。それは HTML の利点を生かして文の構造を自由に樹形図として展開してゆけるような形で、一見「語と語の繋がりが無秩序」のように見える口語体のベトナム語文を学習者に無理の無い範囲で視覚的に示すよう努めた。あくまで学習者の理解プロセスを追う形で、《個々の語義→フレーズの切れ目とその意味→文全体の意味》というボトムアップ方式で個々の文の意味を示しつつ、文全体の意味を示す際には逆に《大→小》への展開も可能にした。

このような仕様が可能なのはベトナム語が孤立型言語で語形変化がなく、樹形図に示しやすいからだと考える。

中級以上の学習において映画の有用性がしばしば指摘されるが、ベトナム映画を利用した教材で利用に耐えうるものがこれまでなかった。そこで、ベトナム映画界を代表する監督ダン・ニャット・ミン（Đặng Nhật Minh）氏の全面的な協力の下、同監督の代表作『10 月になれば（Bao giờ cho đến tháng mười）』、『46 年冬―ハノイ（Hà Nội - mùa đông 46）』を教材化した。特に前者の映画に出てくるほぼ全ての文を利用して口語をベースとした中級ベトナム語文法の枠組みを示せたことは、ベトナム語教育において一定程度の意味を有するものと思う（http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/ilc-list/20123）。これ以外にも教材として利用許可を得た優れた映画があり、適宜中級リスニング授業で利用している。

３．方言の問題

話は変わるが、2013 年公布の新憲法で、前 92 年憲法にはなかった「国家言語（National language）」という概念が出現し（第 1 章「政治制度」第 5 条）、「国家言語はベトナム語である。」という一文が付加された。これは「ホーチミン思想」を受け継いで、少数民族諸言語と大多数民族ベト族の言語（ベトナム語）の間には優劣差がないと説いた 92 年憲法の思想が、2013 年憲法で崩れ去ったことを意味する。そうなると今後少数民族がコミュニケーションツールとして学ぶべき国家言語の規範化がより進行する可能性があり、引いては地方文化を彩る方言の位置づけにも影響が及ぶかもしれない。現状では各地方局の放送は多くの場合、北部方言を基礎とするローマ字表記法に忠実な標準的言語と方言の発音が混在した形でなされるが、今後は標準的な色合いがより濃くなってゆく可能性も否定できない。いずれにせよ現状がしばらくは続いてゆくことを見越して、有る程度の方言音に慣れておくことも中級以上の学習では重要である。その際、世界言語研究センター時代に開発された「社会人を対象とした学士レベルの外国語教育プログラムの提供」事業コンテンツの一部が有用である。そこにはベトナム語南部方言の発音をマルチメディアで紹介したページがあり、今後学習者が接する可能性が極めて高いホーチミン市出身者の発音が示されている（http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/flit/ public/vi/pronum10/index.html）。

４．ソーシャル・ネットワークの利用

今や Facebook アカウントを持っていないというと「えっ、なんで？」という顔をされるが、個人的にこれは学習者が同年代のベトナム語話者と自由にベトナム語で通信しあうツールとして位置づけたい。もちろん教師がそこで一緒に議論しあうことを否定するものではないが、これまでの経験から教師が口を出した途端に学習者の発言が少なくなってしまうことがしばしばあった。したがって、教師の目を気にせずベトナム語母語話者を交えて積極的にアウトプットする機会として意識的に利用すれば一定の効果が得られるであろう。SNS 利用の基本的なエチケット等もはや言うに及ばないが、ベトナム語中級学習者として留意すべきことは、相手が未知の人物であれば、躊躇せずに性別・年齢を聞いて呼称法を見極めた上で、最低限の礼儀を尽くした会話を楽しむよう努めるべきである。上級学習者になるとそれを適当に避けつつ会話する術もあるわけだが熟練を要する。

５．授業と自律学習

漢語由来の諺 *Sư phụ lĩnh tiến môn, tu hành tại cá nhân*（師父領進門、修行在個人）の言葉通り、週たった 1 コマの授業で、教師は素材と学習法の「さわり」を伝えられるだけであり、それを地道に実行するのは個々の学習者である。特に上述のリスニング学習のサイクルを続け、完全に内容を理解した素材を各自の端末に取り込み身体に沁み込むほど聞き続けるにはそれなりの時間がかかる。しかし、それを地道に続けるならば、これまで無意味な音の連続の中に既習の語彙がちらほら紛れ込んでいたのが打って変わって、個々の語彙が突き刺さるように脳裏に飛び込んで来る瞬間にはっとする時が訪れる。それを信じて精進してほしいものである。

情報活用基礎を担当して

田中 博和 (理学部 生物科学科)

理学部の情報活用基礎

2011 年より理学部生物科学科の教員として、理学部の情報活用基礎を分担で担当しています。今年度で 4 回目の担当を終えたところでこの原稿を執筆しています。理学部生物科学科は2012年より 4 人の教員で分担しながら、情報活用基礎の担当を行っています。理学部では基本的に入学時に数学科、物理学科、化学科、生物科学科のそれぞれの学科に分かれて学生が入学してきます。私たちが担当するのは、この各学科の 4 分の 1 に相当する学生です。つまり、異なる基礎教育を受けてきた、異なる興味を持つ学生が混在した、非常に多様な混成クラスであると言えます。教える方の教員はと言いますと、私個人は普段の研究ではコンピューターは顕微鏡画像の解析や、DNA やアミノ酸配列の解析、データベース検索等に使っていますが、特にコンピューターの専門家という訳ではありません。生物系の学生に、実際の研究ではこんな使い方をするのですよ、と教えるのであればやりやすいのですが、物理や数学の学生が、情報活用基礎でどのようなことに興味を持っているのかは、推し量るのが難しいところです。内容が簡単すぎるのか、暇そうにしている学生を見かけ、この混成クラスの難しさを感じたりもします。そのようなこともあり、この授業に関しては学科別のクラス編制にするほうが良いと感じています。実際に、そのようなクラス編制にしてほしいという要望を生物科学科の教員がだしていますが、残念ながらこれが実現される見通しはないようです。その理由としては、共通教育では学生の専門分野にとらわれず、広い視野を身につけてほしいという考え方が根底にあるようです。

今年度からの取り組み

上述のような背景があり、私たちが担当する教室では、昨年までは、コンピューターの基礎的な使い方について、生物科学科的内容にはそれほどふみこまず、他の学科にも役に立つと思われる事項について、教えてきました。実際の内容としては、ホームページの作成法、情報倫理、図書館活用法、画像の加工と処理、表計算、グラフ作成、シミュレーション、LaTex による文章作成などになります。本年度からは、前半部分は生物科学科の教員が教え、後半部分は各学科の教員が専門を活かした内容を教えるという、新しい試みも始まっています。また、今年度からは、倫理教育のためにひょうせつ防止のパンフレットも配布するようになりました。ネガティブなことから始めるのは面白いものではありませんが、学生がネットであふれる情報などを公正に利用するためには必要な教育だと思います。

実際のコンピューター演習の内容について

次に、実際に私が情報活用基礎を担当した経験から、感じたことについて述べたいと思います。私が担当している部分は、年によって若干、内容に変更がありますが、画像の加工と処理、表計算、グラフ作成などの部分になります。画像関係のソフトとしては、Gimp（フリーの描画ソフト）、パワーポイント（プレゼンテーションソフト）、ImageJ（画像解析ソフト）を、表計算、グラフ作成にはエクセル、Gnuplot などを利用しました。実は、この講義を担当する前には Gimp や Gnuplot については聞いたこともありませんでした。また、普段利用しているソフトについても、学生に教えることを前提として見直すことで、私自身も勉強になっています。ソフト自体の使用経験を学生に聞いてみたところ、かなりの学生は、大学入学以前にパワーポイントを使ったことがあるようですし、エクセルも簡単に使いこなせるようです。ソフト自体が使いやすく作られていることもありますし、インターネットで検索すれば、使い方を詳しく説明したページも見つかります。ただし、近似曲線の作成等、少し複雑なエクセルの計算をしようとすると、作業スピードにかなりの個人差がでるような気がします。また、私が受け持っているクラスでは、前項でも述べたように、非常に多様な学生がいるため、そもそもこれらのソフトに慣れ親しんでいる学生もいれば、そうでない学生もいま

す。
後者の学生をおいてけぼりにする訳にはいきません。そのため、受講生全員が基本の使い方に慣れるように授業を進める一方で、初歩的なところをすでに理解している学生は、より高度な内容にも取り組めるような授業構成を考える必要があることを痛感しています。

端末システムについて

サイバーメディアセンターのシステムについては、ユーザー名とパスワードを入力すれば、どの端末でも同じ環境でコンピューターを使用でき、自分のファイルにアクセスすることができます。また、2 つの端末の間には教員用PCの画面をミラーリング表示することもできて、大人数の学生に対する講義には理想的な環境だと思います。また、今年度は画像の加工と解析用に、生物系でよく利用されているソフトである ImageJ をインストールしていただきました。この依頼に速やかに対応していただいた担当者の方には感謝しています。また、毎回の授業を支えていただいた TA の方々にも、この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。